



マーサ・C. ヌスバウムにおける感情と教育に関する 考察ー子供を手がかりとして

章, 博文

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2024-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8513号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482261>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

マーサ・C.ヌスバウムにおける感情と教育に関する考察
一子供を手がかりとして

氏 名 : 章 博文

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 茶谷 直人 教授
(副) 中 真生 教授
(副) 大橋 完太郎 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本稿ではアメリカの哲学者、ヌスバウムの理論について、感情及び子供の教育をめぐって考察する。このテーマを取り上げる理由は二つある。一つは目は、ヌスバウムの嫌悪感論をテーマにした修論の終章で、同情と感情教育に関するヌスバウムの理論について展開できなかった論述を引き続き研究するためである。もう一つの理由として、デジタル化が進む現代社会において子供の文化・生活はテレビや玩具などの電子製品に支配されており、他者に共感する能力の欠如という「人間関係の希薄化」の危機に陥っている。特に新型コロナウイルスが蔓延した現在、対面授業の代わりに zoom でリモート授業を行うことによって、人と人はより遠ざかり、「人間関係」に関する子供の認識や意識が薄くなっていく危険性がある。そのため、子供に「人間関係」についての意識を喚起し、他人に共感する能力を育てるためにいかに教育、特に感情教育を行うかという問題は、現代社会にとって一つの重大な課題である。ということで、「感情」と「教育」問題を取り上げるヌスバウムの思想を考察することは現実的な意義を持つ。

1986年に出版された *The Fragility of Goodness: Luck And Ethics In Greek Tragedy And Philosophy* は、学術界において話題となった。その時から、ヌスバウムの思想は世界中で注目を浴びてきた。英語圏、日本、そして中国でも、ヌスバウムの思想に関する研究は大量に存在する。だが、それらは主に政治と教育または感情と政治の組み合わせを中心にしたものであり、感情と教育を組み合わせた視点からのヌスバウム研究は少ない。日本において代表的なヌスバウム研究の著作は、神島裕子の『ヌスバウム—人間性涵養の哲学』である。その中では、ヌスバウムの感情理論に触れた部分が少ない。中国では、ヌスバウム思想の初登場は2009年に出版された *Poetic Justice: The Literary Imagination and Public Life* の中国語版である。そのため、中国にいるヌスバウム研究は政治と文学をめぐるのが最も多い。近年、日本でも中国でも、ヌスバウムの感情思想に対する関心度は高くなってきているが、彼女のほかの理論のとは比べて多いとは言えない。特に感情、教育、文学という一連に関する研究は僅かである。英語圏においては、2019年にヌスバウム研究の論文集 *Martha Nussbaum Ancient philosophy, Civic Education and Liberal Humanism* が出版された。この論文集に収録されているのは、ギリシャ哲学、市民教育、自由主義的ヒューマニズムをめぐるヌスバウム思想に関する研究である。そのため、序章においては、この論文集に基づき、古代ギリシャ哲学と市民教育に関するヌスバウムの思想の概貌を大まかに捉える。

本稿は主にマーサ・C.ヌスバウムの著作 *Upheavals of thought: The Intelligence of Emotions*(2001)、*Martha C. Nussbaum, Political Emotions: Why Love Matters for Justice*(2013) そして、*Poetic Justice: The Literary Imagination and Public Life* における感情と教育と文学に関する内容を踏まえ、子供の教育を手がかりにして、彼女の理論を整理しながら検討を行う。本稿は五章から構成される。

第一章では *Upheavals of thought: The Intelligence of Emotions*(2001)の第一章に焦点を当て、ヌスバウムの感情論の全体像また特徴を捉える。第一節では、ヌスバウムの感情論の中心理論として、幸福主義理論と感情の価値判断をめぐる彼女の議論を整理し、ストア学派の感情論と彼女の関連性を論じる。第二節では、ヌスバウムが提示する感情の定義づけの要素、認知的要素と非認知的要素について、彼女の主張をまとめる。結論としては、ヌスバウムの感情論の中で、最も魅力的だと思うところは二つある、一つ目は幸福主義論とのつながり、感情の文脈を重んじるところたま感情の非理性に立ち向かうところだ

と筆者は考える。もう一つは幸福主義的感情の価値判断によって人間が世界と関わる底にある脆弱性のことである。しかし、この二つには、問題点がある。一つ目の問題は、それは、無意識の感情が身体の状態として感情を定義する必要条件ではないというヌスバウムの主張である。それはは身体の状態としての感情が人間への影響に対してヌスバウムは過小評価していないかという。この問いを論じるために、第三節では、身体関係の感情の働きを明らかにするために、マインドフルネスを取り上げ、それをヌスバウムの感情論と結び付けて議論をする。

第二章では *Upheavals of thought: The Intelligence of Emotions*(2001)の第四章・幼児期の感情を中心にしてヌスバウムの議論を検討する。第一節では幼児期の恥と嫌悪感の正体について検討する。それを通して、彼女が指摘する「人間性」を明らかにする。それは、人間性に根付く脆弱性が幼児期の無力に対する私たちの恥や不安と結びついてるという。第二節では *Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities* の第三章・市民教育の内容に基づいて、ヌスバウムが示唆する学校での子供の教育が社会に及ぼす危機について明らかにする。つまり恥と嫌悪感とは社会の道德危機を煽る危険性があることである。そして、幼児は恥よりも親を支配する傾向があり、その支配する欲望に道德的危険性があるというヌスバウムの主張に対して、筆者は第三節と第四節において、彼女の理論を論じる。まず、第三節ではアリソン・ゴプニックの赤ちゃん理論の視点から、ヌスバウムが描く幼児像を再検討する。そして、第四節では、脳科学と母性ケアの視点からヌスバウムにおける親子関係を論じる。

第三章ではヌスバウムの同情と共感について論述する。第一節では、感情の社会学の立場から同情の危険性を示す。そのうえで同情と共感についてヌスバウムの理論を見直す。筆者は同情と共感の関連性を明らかにした上、ヌスバウムにおいて、共感に関する論述は不十分であると指摘する。第二節では、「Compassion and Beyond」という論文におけるヌスバウムの同情の判断の三要素に対する批判を論述する。同情は社会感情として検討する余地があることがわかる。

第四章では、*Political Emotions: Why Love Matters for Justice* をめぐり、同情を公共生活に置いた子供の感情教育について検討する。第一節では、愛国主義に関するヌスバウムの議論を検討する。強い想像力は想像と公平原則の間の橋になる。公共生活の同情はその対話と橋を重視すべきだというヌスバウムの主張を明らかにする。第二節では、感情教育に対するヌスバウムの提案をまとめ、前期と後期との変化を見出す。ヌスバウムの提案は、主に文学をめぐることがわかる。つまり、読書で自分の内在の感情や経験などを検査することである。それに、*Political Emotion* において、ヌスバウムは身体に視点を当てる。身体の動きが公共の感情に対して重要な要素になる論述は彼女において見える。第三節では、孟子の憐れみの思想にするフランソワ・ジュリアンの対比哲学的論考を踏まえ、ヌスバウムによる「同情」をめぐり思想の特長と制約を検討する。

第五章では、*Poetic Justice: The Literary Imagination and Public Life* における文学的想像力と感情に関するヌスバウムの理論を議論する。第一節では、功利主義へのヌスバウムの批判を論じる。そのうえで、社会にとっての文学の重要性を示す。第二節では、アリストテレスの悲劇論と同情を議論する。それを小説と結びつけ、ヌスバウムが提案する悲劇小説について検討し、悲劇小説の同情にとっての役割を明らかにする。アリストテレスの「悲劇論」とアダム・スミスの「公平な観察者理論」に基づくヌスバウ

ムの文学論を明らかにする。第三節では、ヌスバウムの『詩的正義：文学的想像力と公共生活』に対する中国の学者たちからの批判を検討する。それを通じて、文学的想像力に対するヌスバウムの理論の問題点を示す。第四節では、夏目漱石の「自己本位」論における他者との関係に関する論述をヌスバウムのもものと比較する。第五節では、ヌスバウムの「文学的想像」を漱石の「文芸論」と比較しながら、文学作品の重要性および複雑性を示す。

論文審査の結果の要旨

氏 名	章 博文		
論 文 題 目	マーサ・C.ヌスバウムにおける感情と教育に関する考察——子供を手がかりとして		
要 旨			
本論文は、現代アメリカの哲学者マーサ・C・ヌスバウムにおける「感情と教育」をめぐる思想の特長・意義及び問題点について、孟子や本居宣長・夏目漱石なども含めた様々な関連思想も比較参照しつつ考察した論考である。こうした主題の背景にあるのは、デジタル化された現代社会に育つ子供たちは、具体的他者に対する共感能力を十分に育むのが困難な環境にあるという、著者の強い危機意識である。 論文構成は次の通りである。まず第一章では、<i>Upheavals of thought: The Intelligence of Emotions</i> (2001) にもとづき、感情と価値判断をめぐるヌスバウムの議論の要点を整理し、彼女の出発点となっているアリストテレスの幸福(eudaimonia) 論やストア学派との関連が概観される。 さらに、現代の瞑想療法である「マインドフルネス」と対比させつつ、彼女の見方の特徴を際立たせる。両者ともに、ネガティブな感情から逃げるべきではないと説く点では共有しているが、ヌスバウムは知性の媒介を重視するのに対し、マインドフルネスは、静かに呼吸しつつ、今ここで生じつつある微妙な情動の変化に注意を向けることで、ネガティブな感情への自動的・習慣的反応から自由になることを目指すところが異なると著者は指摘する。 幼児期の感情をテーマとする第二章では、ヌスバウムは、幼児が持つ「全能感」と現実との決定的乖離が「恥」と「嫌悪感」の根本にあると考えているのに対し、心理学者のアリソン・ゴブニックは、「赤ちゃん」と他者や世界との関係は、ヌスバウムが考えるよりは調和的で積極的なものだと考えており、その意味で著者は、ヌスバウムの「幼児」観は少し偏ったものであり、彼女の思想の全体的方向にも影響を及ぼしているのではないかと、疑問を提示する。 第三章は、共感と同情との関係・差異をテーマとする。ヌスバウムは、「共感」は基盤的なものだが道徳性に欠けていると考えるが、「共苦」としての同情に大きな道徳的価値を見る。そうした彼女の見解の特徴・妥当性を、著者は、同情も互恵的交換行為として捉える社会科学的見方や、良い方向にも悪い方向にも使われうる「共感の両義性」を重視する行動学者フランス・ドゥ・ヴァールなどの見方と対比させつつ批判的に検討する。 第四章では、後期の代表作の一つである <i>Political Emotions: Why Love Matters for Justice</i> (2013) に基づき、まず、「公共感情としての同情」を育成するための感情教育の役割と、同情の自然的形態としての愛国主義を限定的に肯定する彼女の見解を確認したのち、その含意を論じる。さらに、孟子の「惻隠の情」論や本居宣長の「もののあわれ」論と対比させつつ、彼女の「同情」論の特徴を際立たせる。ヌスバウムにおいて「同情」は、人間は根本的に「脆弱な」(fragile) なものだと捉える人間観と結びついているが、著者は、中国の劉永春らによる批判——確かに、アリストテレスも「人間の有限性と生命の脆弱性」を見据えていたが、それにもかかわらず、「人間は強さと勇気でそれらを超越することができる」と考えていたのであり、その意味において、彼女のアリストテレス解釈は誤っており、その			
<table border="1"> <tr> <td>主査記載 氏名 (白署)</td> <td>茶谷 直人</td> </tr> </table>		主査記載 氏名 (白署)	茶谷 直人
主査記載 氏名 (白署)	茶谷 直人		

人間観は「脆弱性」を強調する、偏りすぎたものとなっているという批判——を踏まえつつ、ヌスバウムとは異なる観点から「同情」の意義と射程を捉え直す必要性を示唆する。

フランソワ・ジュリアンによれば、孟子の「四端」説が説くように、「忍びざる反応は、人間らしさの感情の基盤にあり、この仁の感情に道徳性が集約されている」。つまり、「惻隠の情」は自然発露的であり公正無視なものであり、性善説に立つ孟子は、「仁」自体に道徳性が十分備わっていたと考えた。ヌスバウムは、同情の発現には人間的知性の媒介を経る必要があると考えたが、「忍びざる反応」の自然性を見落としていると著者は論じる。一方、憐れみの発露が公正無視なものと捉えた孟子は、憐れみが「同情」において行動化される必要性と難しさを軽視したと著者は考える。

一方、宣長における「あわれ」は、確かに、もっとも深く感ずる“あわれ（情感・感動）”が悲哀であり、そのゆえに、往々にして「あわれ」は悲哀に限定されてきたが、元来、「あわれみ」に限られない。その意味において、道徳に重きをおいた孟子を含む儒教の「漢心」に対して、宣長が「もののあわれ」を主張したことには一定の理由と意義があった。また、人は物語を読むことを通して「もののあわれ」を知ると説いた宣長と、物語を通じて想像力と同情を育むことの重要性を説いたヌスバウムとの共通点は明らかだと著者は指摘する。

第五章では、文学的想像力と感情に関するヌスバウムの見解を *Poetic Justice: The Literary Imagination and Public Life* (1998) を主たるテキストとして考察する。彼女の功利主義批判の意図を理解しつつも、著者は、中国人研究者の研究も踏まえつつ、ヌスバウムの「詩的正義」論は過剰な役割を文学に期待していると批判する。しかし、彼女の見解を漱石の「作家の態度」論などと対比させ、限定的なものにせよ、文学が持ちうる「他者への感化力」の重要性を確認する。

本論文は、様々な見解相互の関係が十分に整理しきれていないことなど、指摘されるべき点は少なくないが、議論の基本的方向はきわめて大きな意義を有し、さらなる展開に値する貴重な問いの萌芽を多く含んでいる。とりわけ、西洋とは異なる中国や日本の思想的伝統も視野に収めた比較研究は、きわめて大きな可能性を感じさせるものである。以上の点から、本審査委員会は、論文提出者・章博文が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと全会一致で判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名 (自 署)	区 分	職 名	氏 名 (自 署)
主 査	教授	茶谷 直人	副 査	教授	中 真生
副 査	講師	高橋 弘志	副 査	講師	安倍 里美
副 査	広島市立大学国際学部 客員研究員	高橋 信博			